

ルツ記 1章 1-19 節 a

テモテへの手紙 2章 3-15 節

ルカによる福音書 17章 11-19 節

先週は、後半から急に気温が下がりました。今週はまた少し気温が上がるようです。みなさまどうぞ、くれぐれも体調にお気を付けください。

本日の旧約日課は、「ルツ記」が選ばれています。3人の女性、姑のナオミ、嫁のオルパとルツが登場しますが、主な登場人物はナオミとルツです。それぞれ3人とも夫を亡くしてしまい、家族離散という状況の中から話が始まります。

ナオミは、嫁たちに「わたしの娘たちよ、帰りなさい。どうしてついて来るのですか」（ルツ 1：11）と、それぞれの道を歩むことを勧めます。「二人はまた声をあげて泣いた。オルパはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった」（ルツ 1：14）とある通り、オルパは自分の道を歩いていきますが、ルツは、モアブ（死海の東側）というイスラエル以外の異邦人でありながら、姑ナオミに従い続けます。

「あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。」（ルツ 1：16）という表現がありますが、ルツは姑ナオミに従うことを通して、主なる神様、すなわちイスラエルの神様への信仰を貫いていくのでした。ルツの選択は、最終的にボアズとの結婚へとつながり、二人から生まれた子どもオベド、エッサイ、ダビデとつながっていきます。「ルツ記」は、イスラエルという集団の存続的継承が、人間的なつながりを超えていることを示しています。それはいわゆる血族的な継承という枠ぐみを超えているということです。主なる神様への信仰に、異邦人がそこにはいることを「良し」としているということです。『聖書（旧約）』の信仰、いいかえれば「ユダヤ教」は、ユダヤ人の信仰・宗教と認識されることが多いのですが、その信仰・宗教の担い手は、イスラエル・ユダヤ人には限定されていないのです。それは、『聖書（旧約）』の主なる神様が、すべての人にその救いをもたらせようとしているからです。

さて、本日の福音書の物語は、10人の思い皮膚病を患った人たちの清めの物語です。「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」（ルカ 17：11）とある通り、場面は、ガリラヤとサマリアの間あたりのようです。細かいことですが、サマリアは、ガリラヤより南ですので、「サマリアとガリラヤの間」という表現は、エルサレムから見た表現です。村の名前などの具体的な表記はありませんので、どこを移動中なのかを示すことが目的ではありません。場面がユダヤ人とサマリア人の両方が混在するような地方である、という情報を提供しているのでしょう。そして、その情報は後々重要な意味を持ってきます。

この物語が成立するまでの正確な伝承経過はわかりません。また、「マルコによる福音書」1章40節以下の「重い皮膚病（新しい訳では「既定の病」）の人の清めの物語」と構造がかなり異なります。しかし、両者を関係させて解釈することが大切であると思います。マルコの物語では、イエス様に清めを願い出た名もない人がイエス様に清められます。そして、その人は、祭司のところへ行けというイエス様の命令には従わず、最初の宣教者となります。人間を清いとけがれにわけける区分が、イエス様の登場によって終わったことを、自分のからだを証拠にして宣教し始めるのです。その点では類似するからです。

本日の「ルカによる福音書」の物語では、イエス様の旅路の描写の後、「ある村に入ると、重い皮膚病を患っている十人の人が出迎え、遠くの方に立ち止まったまま、声を張り上げて」（ルカ 17：12-13）とあります。人数は10人となっています。また「遠くの方に立ち止まったまま」とあり、それは彼らが「重い皮膚病（既定の病）」に関する律法に従い、イエス様と距離を置いていたからです（レビ 13：46、民 5：2-3）。この点は、「重い皮膚病（既定の病）」を患っている人が近づいてくる、マルコの描写とは違います。彼らは、「イエスさま、先生、どうか、わたしたちを憐れんでください」（ルカ 17：13）と叫ぶのですが、この文言もマルコの描写とは異なっています。ことに「先生」（原語の文字通りの意味は、「上に立つ人」）は、ルカにしか用例がない言葉であり、すべてイエス様に用いられています。憐れむという言葉は、「キリエ・エレイソン」の「憐れむ」の語源となる言葉ですが、『聖書』では様々な箇所でも用いられています。

物語の構造が大きく異なるのは、起こった出来事に関する描写です。「イエスは重い皮膚病を患っている人たちを見て、『祭司たちのところに行って、体を見せなさい』と言われた。彼らは、そこへ行く途中で清くされた。」（ルカ 17：14）とあり、イエス様は彼らに触れることもなく、見て、言葉をかけるだけです。彼らも、その言葉だけで「祭司」のところに向かいます。そして、その歩みの途中で奇跡が起こったと描写されているのです。

そして、次に異なる点は、その奇跡が起こった後の物語です。物語としては、このお話の方が長くなっています。最初に「その中の一人は、自分がいやされたのを知って、大声で神を賛美しながら戻って来た。そして、イエスの足もとにひれ伏して感謝した。この人はサマリア人だった。」（ルカ 17：15-16）とある通り、10人中、1人が戻ってきて、その人は神を賛美し、またサマリア人であったと告げられます。

ほかの9人がどこの所属の人であるかは書いてありませんが、「イエスはエルサレムへ上る途中、サマリアとガリラヤの間を通られた」（ルカ 17：11）という最初の描写から考えますと、ほかの9人は「ユダヤ人」である可能性が高いことが暗示されていました。イエス様の時代もルカによる福音書が書かれていた時代も、ユダヤ人とサマリア人との間はあまり良くなかったよう

です。ただし、信じている神様は共通していますから、ここで賛美した神様は、どの神様でもよかったということではなく、『聖書』の主なる神様にほかなりません。

ただし、ルカの描写を見ますと、「そこで、イエスは言われた。『清くされたのは十人ではなかったか。ほかの九人はどこにいるのか。この外国人のほかにも、神を賛美するために戻って来た者はいないのか。』」（ルカ 17：17-18）とあり、イエス様は彼を「外国人」と呼んでいます。この「外国人（原語の文字通りの意味は「他の種族・民族）」は、『聖書（新約）』ではこの個所にしか用例がありません。『聖書（旧約）』のギリシア語訳では数か所で用いられていますが、「外国人」と訳すことが適切です（創 17：27、出エ 12：43 など）。「外国人」という言葉の響きは、今日のわたしたちの意味とは異なりますが、少なくとも自分たちとは文化的に異なる人々という意味であることは確かです（信じている神様は同じはずなのですが）。

この物語の終わりは、「それから、イエスはその人に言われた。『立ち上がって、行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。』」（ルカ 17：19）となっています。このイエス様の言葉は、ルカにおけるほかの箇所での用例と文言が一緒です（ルカ 7：50、8：48、18：42）。またマルコにも（5：34、10：52）、マタイにも（9：22）同じ文言があります。イエス様の救いの宣言の定型句と言えます。物語は、「重い皮膚病（既定の病）」を清められた人への、イエス様の救いの宣言で終わるのです。

「ルカによる福音書」の神学的主題の一つに、「悔い改め」という事柄があります。そのことから考えますと、この物語は、主なる神様への真の新しい信仰へと悔い改めたのは、ユダヤ人ではなく外国人（サマリア人）であったと語っています。外国人と呼ばれた彼の姿が、主なる神様の救いとは、「悔い改め」を通して、すべての人に開かれている、そのことを象徴しているということです。それはまた、悔い改めて教会に集められているすべての人は、イエス様を通して、その同じ救いにあずかっていることも意味しています。

また、間接的になりますが、戻ってこなかった残りの9人についても説明しています。彼らは、自分たちを『聖書（旧約）』の神様を信じている、その民であると思っているが、イエス様による救いの宣言を受けていない人々である、と告げているといえるのです。「悔い改め」ない古いイスラエルへの批判ともいえるでしょう。

しかし、この物語自体にあるイエス様の言葉、そして、先に触れたマルコの物語と関連させて考える場合、残りの9人に何か悪い点があるかということ特別にはないのです。イエス様は10人から「憐れんでください」と求められ、「祭司たちのところに行って、体を見せなさい」としか述べていません。何か特別な言葉を語り掛けるとか、マルコの物語のように手で触れると、何もしていないのです。「祭司のところに行きなさい」と言われ、「その祭司たちが、そもそもわたしたちを汚れていると判断しているのですが」と反論した

くなるような言葉しか、イエス様は語り掛けていないのです。しかし、彼らはそのイエス様の言葉だけを信じて、祭司のところへ向かい、その途中で清められます。清められたわけですから、その点で、彼らの信仰は認められたのです。また、戻ってこなかったということは、祭司に判断してもらおうという「律法」通りの手続きも正しく行ったということでしょう。むしろ、「律法」違反をしたのは、戻ってきた一人のサマリア人の方です。祭司から清いと判断されていないので、イエス様に近づいてはいけないからです。

これらのことを考えますと、ここでは「ルカによる福音書」の特徴である「悔い改め」という事柄が強調されているといえるのですが、マルコにある物語と同じように、戻ってきた一人の人は、清いとけがれを超える生き方の選択ということも示していると思います。

9人は、清められてふつうの生活に戻りました。それは責められるようなことではありません。しかし、彼らの行動選択は、清いとけがれを分ける線引きの、清い方へと移ったことを意味します。その意味では、彼らの意思・考えとは関係なく、彼らは清い側、言いかえれば差別する側に移ってしまいました。しかし、戻ってきた一人は、からだはイエス様の奇跡を通して清められたが、祭司のところに行っていないので律法上は汚れたままです。彼は自分のそのからだを証拠にして、イエス様がもたらした救いを宣教し始めたといえるのです。すなわち人をわけ隔てする線引きの消滅を宣教する道を歩み始めたのです。そしてイエス様はそこに救いがある、そう宣言したのです。

そのイエス様の宣言は、救いとは何かについて示しています。自分を苦しめる病が癒されることも救いです。それを願い、もしその願いが叶ったならば、それは素晴らしいことです。現代でも様々な病があり人を苦しめています。ことに新型コロナは、3年にわたり世界中で多くの人を苦しめています。それらの病、あるいは病だけではなく、争い、紛争、差別、格差など、人を苦しめる事柄がすべてなくなることを求めることは、第一に大切なことです。しかし、それがすべてではありません。イエス様の宣言される救いには、その先があります。それは、今日全体性の回復と呼ばれる事柄とも同じです。病の治癒だけが救いはなく、病に伴うすべての事柄が解決すること、すなわち全体性が回復することが救いである、そのようにこの物語は述べているともいえるのです。人を苦しめる事柄の解決だけではなく、それを伴うすべての事柄の解決、線引きに伴う差別、敵意、それらがすべてなくなることが、イエス様を通して主なる神様があたえる救いに他ならないのです。

そして、イエス様が宣言される救いには、もう一つの側面があります。それは、現実世界において、病や苦しみがすぐには解決しなかったとしても、その救いを信じる人々は、永遠の命の約束によって、その解決の希望が失われることはないということです。永遠の命の希望が、わたしたちの全体性の回復をもたらすということです。そのような救いと希望を感じられる教会形成をこれからも心掛けたいと思います。